小夜子を輪姦したときのことを思い出すと、ペニスは痛いほどに勃起してしまう。パンストを脱がせ、パンティを下ろしていくと、小夜子はハンカチを詰められた口からくぐもった悲鳴を上げた。漆黒の恥毛は、しっとりとして艶やかだった。その飾り毛の奥に、大人の女の媚肉が見える。男を誘う匂いがふわっと漂う。脚をそれぞれ聡と勲に持たれた小夜子は開脚の体勢で信也にのしかかられた。下半身を脱いだ信也はすでにそそり立つペニスを小夜子の股間にあてがっている。
「いやあっ！」
ハンカチを自力で吐き出した小夜子が甲高い悲鳴を上げた。すかさず、脱がしたパンティを口に詰める。次の瞬間、信也のペニスが貫いた。ローションの滑りも手伝って一気の挿入であった。貫かれた小夜子は、
「いや、いや」
と泣きながら何度も目鼻立ちの整った顔を左右に振っていたが、やがて、美しい顔をのけぞらせながら、性の反応を見せはじめる。信也の腰が激しく前後に動き、粘膜がこすれる湿った音がしきりに聞こえだした。いつの間にか、小夜子の脚を押さえている聡と勲は、緊縛した衣服を乱し、ブラをずらして乳房を露出させていた。麗子と同じようなまばゆいばかりの白い乳房だが、姉の小夜子の方が一回りも大きい。
「巨乳だな」
「ああ、巨乳だ。」
「巨乳だが形はいいぜ。」
「肌もいい。吸い付くような手触りだ。」
「さすがは人妻だな。しっとりとしている。」
聡と勲はむき出しにさせた乳房をこねり、乳首を指で挟み込むようにして弄ぶ。

「おまんこの締め付けもいいぜ。人妻はセックスに慣れているだけあって、感度もいいよな」
腰を前後に使っている信也がペニスを抽送させると、小夜子からあえぎ声が漏れ出すではないか。
「もうたまらん！」
信也が膣内に射精しようとする。その兆候を感じた小夜子は、
「中はいや！」
と信也の胸に両手をあてがい、挿入されているペニスを抜こうとした。必死の抵抗を見せる。しかし、信也はさらにペニスを深く打ち込んでしまい、腰をびくびくと震わせる。小夜子の膣奥に熱い樹液が噴き出し、子宮口に当たったのだ。
「だ、だめっ！」
少年の精子による妊娠の恐怖から、美しい顔がこわばる。
「交代だ！」
信也が満足して離れると、すかさず聡が挑んでくる。勃起したペニスは、おもしろいように小夜子の中に沈んでいくのだ。
「おお、これは･･･絡みついてくるじゃないか。名器だ！」
ペニスに膣粘膜が絡みついてくる感触に聡は感嘆の声をあげ、すぐに腰を激しく打ち込みだした。
　３人の射精をすべて膣内に受けた小夜子はぐったりした様子で、全裸に剥かれていた。縄は後ろ手に小夜子の自由を奪っている。足を開かされたまま、その惨めな姿を写された。
「撮らないでっ！･･･いや、いやよっ」
残っていた力を振り絞るように撮影を拒む。美しい顔を背けるが、勲にいとも簡単に顔をぐいっと正面に向けられる。
「ザーメンをおまんこからたっぷり流しているいい構図だ

な。」
シャッター音が幾度となく響く。シャッター音に混じって小夜子の哀しい悲鳴が混じった。
「脚を持ち上げてくれ。尻穴を撮ろうぜ」
信也が小夜子の両足を持ち上げるように要求すると、
「ついでだ。浣腸してしまおう」
と勲がイチジク浣腸の薄いピンク色をした容器をバックから取り出す。キャップをはずすと、小夜子のきゅっと窄まっているアヌスにさし込んだ。容器を握りつぶす。
「そ、そんなっ！」
狼狽した小夜子は、髪を振り乱した。まさか、輪姦直後に浣腸液を注入されるなど思ってもいないことだ。冷たい薬液が腸管に染み渡ってくる。
「浣腸されれば誰だってウンチを漏らすよね。それを撮影されたら、もう言いなりになるしかないんだよ。小夜子さんは、ぼくたちの言いなりになるのさ。」
２個目は信也がイチジク浣腸を施した。３個目は、聡だ。
「絶対にあなたたちを許さないわ！」
小夜子は、３人の少年をにらみつけた。それもつかの間、すぐにグリセリンの効果が現れる。聡が浴室から洗面器を持ち出してきた。
「尻穴を撮ろうぜ」
聡と勲が両足を小夜子の頭の高さまで持ち上げる。上体を折られた小夜子のアヌスが完全に上を向いて露出する。その薬液に濡れたアヌスを信也が撮影した。
「ふふふ、かわいいアヌスだな。」
聡がアヌスに指を押し当てた。
「いやあっ」
小夜子は排泄器官を嬲られるおぞましさに哀しい悲鳴を上げる。しかし聡の指はアヌスをとらえて離さない。勲の指

は、小夜子の陰核を嬲り出す。
「こんなに固くなっているぜ。感じやすい体質なんだな」
表皮を剥かれた陰核は、固く尖っており、勲の指腹で転がされている。
「も、もう･･･お願い･･･おトイレに行かせて･･･」
懇願する小夜子の下腹部でぎゅるぎゅると腸蠕動音が鳴った。しきりに鳴るのだ。その下腹部に信也が手をあてがう。
「これは苦しそうだな。どうしてトイレに行きたいんだい？教えてくれよ」
おどけた調子で信也があてがった手の平をぐいっと押しつけた。
「うぐっ」
ぶざまに呻いた小夜子は、今にも崩壊しそうな恐怖から、
「許して」
と蒼白な顔を力なく左右に振る。
「早く答えてくれよ。どうしてトイレに行きたいのさ」
もう一度信也が手の平を小夜子のぬめ白い下腹部に押しつける。
「や、やめて･･･言うわっ･･･ウンチがしたいの」
絞り尽くすような声だった。
「ふふふ、恥ずかしいことを言うじゃないか。でもトイレを使うことはだめだな。ここでウンチをするのさ。」
「そ、そんな･･･おトイレに行かせて･･･」
小夜子の美しい顔は、すでに蒼白で、唇はわなわなと震えている。崩壊はまもなく訪れるだろうと、アヌスに指をあてがっている聡は思った。しきりに小夜子のアヌスは収縮を繰り返しているのだ。内側からこじ開けようとする圧力に対抗するようにアヌスがしまっている。しかし時折、猛烈な圧力の前に屈しそうになり、小夜子はあわててアヌスを締め直すのだ。その動きを感じながら、指を深く入れて

しまいたい衝動にかられる。
「それじゃあ、あと１０分我慢しなよ。我慢できたらトイレに行かせてやるよ。排泄姿を写すことも許してやるぜ」
信也の顔を見つめた小夜子は
「ああ、もうだめなの･･･わかって･･･」
とさらに哀しい声を出す。崩壊間近なのだ。とても１０分間も我慢できるとは思えない。崩壊すればこの場で汚物をまき散らすことになる。そうなれば人間としておしまいになると小夜子は恐怖した。
「それじゃあ、ここでお漏らしするんだな」
と信也がスマホを構えた。勲が洗面器をあてがう。
「ひ、ひどい･･･」
小夜子はおこりにかかったように震え出す。いよいよ排泄が始まると思いきや、小夜子は耐えるではないか。額に生汗を浮かべながら、必死にアヌスをすぼめているのだ。驚いたことに、約束の１０分まであと少しというところまで耐えていた。
「あと１分でトイレに行けますよ」
にやりと笑った信也が、小夜子の下腹部を強く押した。
「ひいっ、いやあーっ」
小夜子の断末魔の悲鳴とともに、崩壊が始まった。洗面器に汚物がほとばしり出る。我慢していた分だけ、小夜子の排泄物はその量を増している。
「これは派手に洩らしたものだ」
「まだ出てくるぞ、洗面器が重くてかなわないな」
勲が支えている洗面器に、小夜子の排泄した柔らかくなった便がうねうねと重なっていく。シャッター音がしきりに響く。信也は何枚もあらゆる角度から美しい人妻の排泄姿を写していく。もちろん小夜子の顔も撮影した。
「美しい女のウンチの匂いは気にならないよな」

間近で見つめている聡の言葉に、洗面器を持っている勲が深く頷く。信也は、美人でもウンチは臭いものだといいたかったが、口に出すことはなかった。小夜子は排泄を続けながらとうとう泣き出した。その泣き顔は、中澤先生とよく似ていると信也はスマホで撮影しながら思うのだった。